

子どもたちの「現在」を考える①

孤立した「現在」と持続する「現在」

本田和子

(児童学者)

はじめに

いま、子どもの周囲に立ちこめる暗雲を、「未来を実体化できないこと」に基因するととらえた識者があった。確かに、未来へと流れる時間を真のものとして実体化できないとき、子どもは、暗い無気力に支配されるか、あるいは、自己中心的な「現在」の豊かさを願うしか、すべがないのかもしれない。

そして、その空しさは、子どもとかわりを持つ人々にとって、一入ひとしおのものとならざるを得まい。なぜなら、子どもたちは「現在を生きる人」にほかならないから、「現在を豊かに生きてほしいと願いつつ、しかし、彼らの長い余命が、行方を見えない「未来」に展開されるものであることも熟知しているからである。ゴールの見えないレースを、共に走り続けているような空しさ、ということも可能だろうか。

本田和子 (ほんだますこ)

児童学者。お茶の水女子大学前学長、名誉教授。
『異文化としての子ども』『子ども 100 年のエッセイ』
『それでも子どもは減っていく』など著書多数。

子どもと大人の余命

子どもと大人を隔てる最大の壁の一つが、「余命の長短」にあるとされる。たとえば、現在の社会の中心的担い手を四十歳前後の大人と仮定すれば、彼らの「余命」は四十〜四五年ということになる。ところで、いま五歳の子どものそれは、八十〜八五年ということになって、およそ二倍の長さを誇る。子どもは、四十年先の社会に関しては、辛うじて予測することができるとして、八十年先の社会のあり方を、想像する力に乏しい。子どもたちの生きねばならない社会を、見定める視力を持たないのである。

とは言え、子どもたち自身に先への展望を求めることは無理に過ぎる。その責は、親や教師など、育む者の肩に担わされているのである。しかも、それを、「テクノ社会への適応」とか、「高齢社会の担い手」などという現体制の要求する未来像としてではなく、いま眼前に生きて動いている幼い彼らに即して、彼らの「未来に生きてある姿」を想い描くことは極めて困難であろう。ゴールの見えないレースの空しさは、そこに基因する。「こんな時代に子どもを産みたくない」という若い男女の呟きも、同じ根から発生していると言えよう。

改めて、「子どもの時間」を考える

いまさららしくと鼻白むことを止めて、「子どもたちの時間」について想いを潜めてみよう。子どもとは、「未来のため」ではなく、「現在の時間」に輝きを見せる存在であるとは、繰り返し唱えられてきている。とかく将来の準備期間とみなされがちだった子ども時代を、独自

の価値においてとらえ返そうとしたこの指摘は誤ちではない。「子ども期の独自の輝きの発見」とは、二〇世紀の「子ども中心主義」による最大の功績の一つと言える。

しかし、子どもたちの「現在」は、孤立した「瞬間」ではあり得ない。ヘーゲルとキェルケゴールとの、あるいはベルグソンとバシュユールなど、碩学たちの時間論争を振り返るまでもないだろう。彼らの「現在」は、孤独な点ではなく、幅も長さもある「展開せるいま」と言うべきではないか。

卑近な例を挙げてみよう。子どもたちが、「絵本」のあるページ、あるいは「テレビ」のある画面に熱中するとき、彼らは、そのページによって、あるいはその画面によって出現させられた「現在」に滞在している。彼らの視界を占領するのは、「いま、展開されているその世界のこと」だけ……。しかし、子どもたちは、そのページや画面が前のページや画面からの連続であることを知っているし、次にめくられるページや画面が、「新しい現在」を出現させ、そこに自分たちを滞在させるであろうことを予知している。

子どもは忘れてはならない。子どもたちの「現在を生きる姿」に感動し、それを大切にするといいことが、彼らの生を「細切れでとらえること」と同義ではないということ……。 「現在」に没入する彼らのありようは、その中に、「過去」と「未来」を含み持つ、「展開せる生の様相」にほかならないのだから。

子どもたちは「過去」を持っている

幼い子どもにも「過去」がある。三歳児には二年数か月の、四歳児には三年数か月の、一

人ひとり異なった生の過程が、彼らの後に積み重なっているのである。それらの年月は、子どもたち一人ひとりで互いに異なるし、また、彼らを支える大人たち、たとえば親や教師とも、あるいは評論家や為政者のそれらとも、大幅な隔たりを示すのではないか。とりわけ、現代のように変化の激しい社会にあつては、安定した社会のそれらに比して、より一層の隔たりを見せることは自明であらう。

私どもは、自身の「過去」を想起し、その功罪を論じることができない。しかし、それらは、いま「子どもである人」に適用することはできない。それに、彼ら一人ひとりの「過去」を、適確に想定することなど出来はしないのである。

ただし、彼ら一人ひとりの過ぎた時間の中の経験を掘り起こすことは不可能であつても、それらは彼らの「現在」に包み込まれている。子どもの時間が「現在」にのみ比重のかけられるものであり、その「現在」が過去と未来を含み持つ「展開せるいま」であるとすれば、彼ら一人ひとりの過去は、彼らの「現在」の中に顕現する。彼らの「現在」ときめ細かにつき合うことで、かけがえのない、そして抜き差しならぬ、「過去」の体現者である彼らとその「過去」を、受け入れることが可能となるのである。

「一人ひとりときめ細かにつき合う」とは、幼児保育界の鉄則であり、半世紀を超えて繰り返されてきた主張である。従つて、現代の危機に対応するものとして、こと新しく叫ばれるべき原理とも思われない。しかし、子どもたちの「いま生きつつある」時間をとらえ返すとき、まずこつとした基本的な原則が浮かび上がってくるこの意味に鈍くあつてはなるまいと思ふ。